

ミャンマーの有望な経済成長

—成長性と地理的優位性が魅力



ヤンゴン中心部

三菱東京 UFJ 銀行ヤンゴン支店

支店長 木村充宏

なぜ、ミャンマーなのか？

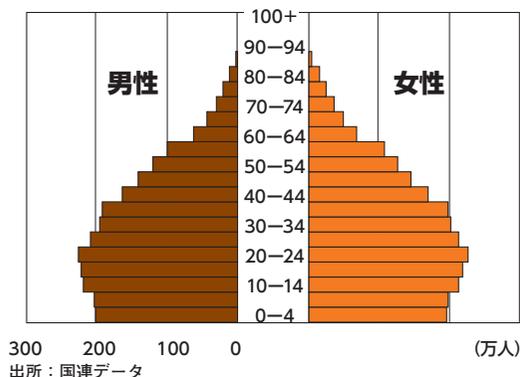
ミャンマーは、2011年3月の民政移管以降、「11年11月の“14年ASEAN議長国への就任決定”」、「12年7月の米国の経済制裁の緩和」などを契機に、市場として、あるいは製造・物流拠点としての関心が高まっているが、この国の魅力を一言で述べると、「成長性と地理的優位性」に集約できる。

ミャンマーの人口は5100万人と豊富な上、24歳以下が人口の約5割を占める「若い国」であり、安価で良質な労働力に恵まれている(図1)。今後の経済発展に伴う彼らの所得向上により、消費の拡大が大いに見込まれる。また日本の約1.8倍の国土には、豊富な天然資源(石油、天然ガス、翡翠などの鉱物資源、森林資源など)が眠っているとされ、これらの開発も期待されている。

ミャンマーはASEANの西側、マレー半島の

(図1) 年齢別人口構成比

- 総人口約5100万人とタイに続く規模
- 24歳以下の人口が全体の44%と若い
- 生産年齢人口(15～64歳)は2030年にかけて増加が見込まれる



出所：国連データ

西側にあり、インド洋に面していることから、ASEANとインド・中東等との物流を考える上で戦略的な立地と言える。

こうした成長性、とりわけ内需の成長性と地理的優位性が着目され、市場として、あるいは製造・物流拠点として、多くの企業がミャンマーを重点戦略国と位置付け、事業の検討および準備を進めているのである。

豊かで勤勉、低廉な労働力

労働力の源泉たる人口は、前述の通り豊富で若い上に、識字率は90%以上と先行するASEAN諸国と同等のレベルであり基礎教育がしっかりとされている。学校教育に加え、全国各地に存在する僧院で僧侶が読み書きを教えており、まさに寺子屋が義務教育の補完として機能している面も見られる。“次の新興国”という観点でよく比較されるカンボジアやラオスの識字率は、それぞれ7割程度である。ミャンマーの識字率の高さはこれら3カ国の中で際立っており、従業員教育や管理の面でも優位性がある。また生産年齢人口(15～64歳)は、30年にかけて6000万人台までの増加が見込まれている。

仕事に取り組む姿勢も、他のASEAN諸国と比べると真面目であると評されている。国民の9割超が敬けんな仏教徒であり「現世を真面目に勤めないと来世で苦勞する」という考えは、真面目で勤勉であることの背景の1つである。

12年6月に最低賃金法が成立していたが、最低賃金の水準についての労使間の協議において双方